

# 留学生による母国における国際ボランティアの可能性と課題

日本経済大学ユネスコクラブのネパールにおける社会貢献活動を例にして

A Study of International Volunteerism by Oversea Students in Their Home Country:  
A Case of Activities in Nepal by the UNESCO Club of the Japan University of Economics

安井 裕司<sup>※</sup>

Hirosi Yasui<sup>※</sup>

## Abstract

The increase in the number of overseas students in Japan has changed their position from special guests to normal students like the Japanese students. In terms of volunteer activities, some overseas students have begun serving as volunteers while in the past they were cared by volunteers as guests. In this paper, I will focus on a case study of the UNESCO club of the Japan University of Economics, Kobe Campus. The club organized an international volunteer activity in Nepal in 2017 with the Kobe UNESCO Association, Japan. Members included Nepalese students and is an interesting case where overseas students of Japanese universities are contributing in international cooperation alongside Japanese students but in their home country. This could be considered a sign of growing maturity of Japanese universities in accepting overseas students.

キーワード：留学生による国際ボランティア、ユネスコクラブ、ネパール

## 1. はじめに

2018年度において日本に滞在する留学生の総数が298,980人に至り、そのうち高等教育機関には208,901人が在籍している（日本学生支援機構、2018）。日本の留学生の受け入れ数は、他の先進国と比較すると決して多くはないが<sup>1)</sup>、日本国内においては2011年度の163,697人から7年間で約13万5千人増えており（同上）、著しい増加傾向にある。それに伴って、当然、留学生の社会における認識のされ方、大学における位置付けも大きく変化しているといえる（安井、2017b）。

特にボランティア活動においては大きな転換が生じている。従来、社会における留学生は、日本語や日本の事情に拙く、異文化からやってきた「お客様」扱い、もしくは区別・回避される傾向が強く、日本人のボランティアから「助けられる」対象であったが、留学生の増加によって、地域の住民の1人として地域ボランティアに積極的に参加し（松本、2001：31-32）、「地域づくりの担い手」になる側に回るケースもみられるようになってきているのである（松永、2016：1）。

本論文では、このような留学生のボランティア活動へ参加実態を先行研究において捉えながら、2017年9月に日本経済大学神戸三宮キャンパス・ユネスコクラブ所属の留学生が地元のボランティア

---

※日本経済大学経済学部商学科

(1) 2013年において日本の高等教育機関に在籍する留学生の割合は、全世界の留学生の3%にしか過ぎず、米国の19%、英国の10%、フランスの6%、ドイツの5%と比較しても少ない（OECD、2015：365）。

組織である神戸ユネスコ協会<sup>(2)</sup>の一員としてネパールにおける社会貢献活動に参加した例を用いて日本に学ぶ留学生の海外（日本国外）におけるボランティア活動について考察する。

その上で、この神戸ユネスコ協会によるネパールでの支援活動では4人のネパール出身の学生が参加しており、母国でのボランティア活動という別の要素が加わっていることに焦点を当てる。そして、日本に留学したネパール人が、日本の地域組織のプロジェクトとして母国においてボランティアを行う際、どのような状況が生み出されるのかをインタビューを通じて明らかにし、留学生のボランティア活動の現段階における課題と可能性について論証することを目的とする。

## 2. 先行研究のレビュー

留学生が地域社会の一員としてボランティアに従事するケースは、比較的新しい取り組みであり、現段階においてはそれを対象にした研究は殆ど行われていない（渡部、2016：1；松永、2016：2）。

少ない例としては、1998年から行われてきた長崎大学医学部付属病院における同大への留学生（バングラデッシュ、ブラジル、ナイジェリア、インドネシア出身で男性3名、女性1名）によるボランティア活動の事例がある（松本、2001）<sup>(3)</sup>。更に、2011年の東日本大震災発生後、韓国からの留学生が仙台のボランティアセンターに登録し、20日間、民家の泥出しの作業などに参加したケースや（許、2011：13-15）、2016年の熊本震災において、留学生をも加わる海外在住ネパール人協会（Non Resident Nepali Association）がネパール地震への日本からの支援に対する「恩返し」としてのボランティア活動を行ったことも報告されている（駐日ネパール大使館、2016）。

これらの留学生のボランティア活動において最大の壁は、日本語力と指摘されているが、逆に強みである留学生の母語能力を生かす形でのボランティア活動も行われている。

例えば、2002年3月に京都府向日市立向陽小学校第6学年の児童76名を対象に、中国からの留学生がボランティアとして中国語と日本語による情報用語を用いながら「国際理解教育」授業を実行したケースがある（熊・佐々木、2002：81）。ボランティアとしてよりも、国際理解教育の実験の要素が強く、ボランティアをする側は研究対象とはされていないが、子供たちの国際理解意識の形成には、ボランティアを行う外国人そのものに対する親近感が第一に必要であるという結論を導いており（熊・佐々木、2002：84）、どのように親近感を出すべきかを考えるヒントになっている。

他には2010年から始まった大分県別府市の留学生による小学生への英語、中国語、韓国語の絵本読み聞かせのボランティア活動がある（工藤・佐藤・松浦・里中・小串・寺本・神野・上野、2013；里中・渕上、2014）。そして、英語や中国語、韓国語を用いた読み聞かせは子供たちにとっても留学生にとっても文化交流の効果が大きいと結論付けられている（同上）。また、近年、日本では各地で日本語を母語としない児童が増えており、留学生が母語を用いてボランティアが行われてきた。福岡

(2) 神戸ユネスコ協会は1947年12月11日に設立されている（神戸ユネスコ協会、2018）。日本では仙台ユネスコ協会、京都ユネスコ協会等と共に最も古い民間ユネスコ協会の一つである。

(3) 松本（2001：38）は、留学生が日本人の患者と交流することによって、①「自分が誰かの役に立っているという実感」、②「日本語でコミュニケーションをとることでの自信」、③「患者との信頼関係を得ることで新しい人間関係」などが得られると指摘している。

(2009) は、三重大学と京都外国語大学に在籍する留学生による、三重県鈴鹿市と松阪市に定住する外国籍の小学生への教育支援を調査している。それは、外国籍で日本に長期滞在する二世が抱える教育問題という新しい課題に対し、異国から日本の大学に学びに来た留学生が子供たちの母語（留学生の母語）であるポルトガル語、スペイン語、カタログ語、中国語を用いて、子供たち夏休みの宿題を手伝うというユニークな試みを分析している<sup>(4)</sup>。

このように留学生が母語を用いるボランティアは効果的ではあるとされるが、日本国内におけるミスマッチの課題がある。現在、日本国内の留学生の40.2%が中国出身であり、23.1%がベトナム出身であり、中国とベトナム出身者で6割以上を占めている（日本学生支援機構、2017）<sup>(5)</sup>。語学のバリエーションや日本人が求める英語に対応できない可能性が高く、結果として、大半の留学生にとって母語を活かすボランティア活動に参加する機会は多くはないのが現状である。

また、留学生側のボランティアに対する要望もある。麻生と松永（2014）は、ボランティアに参加する日本人大学生と留学生を比較し、地域社会と交流を深めたいという部分は共通しているが、日本人大学生は地域社会に存在する問題を共同作業で解決することで交流を図ろうとする傾向が強いのにに対し、留学生は、日本語および日本文化学習を通して地域社会と交流することを求めているとしている。

上記の通り、留学生のボランティア活動に関する分析は十分に研究蓄積があるとは言えず、ボランティア自体の課題にも直面している。留学生30万人時代<sup>(6)</sup>において留学生の全体像が変化するなか、実践的な提案を含んだ、今後の研究が待たれているといえるであろう。

### 3. 日本経済大学ユネスコクラブの「2017ネパール国際ボランティア」の実例

本稿では、前述の通り、日本の大学に在籍する留学生が、地域団体の一員として「国際ボランティア」に参加する例をテーマとする。

日本経済大学神戸三宮キャンパス・ユネスコクラブ（神戸市中央区）は、留学生を中心に2013年末に同キャンパスにて創部された。2014年4月以降、同クラブの学生は全員、神戸市中央区に本部を置く神戸ユネスコ協会<sup>(7)</sup>の青年部の会員となり、以降、神戸地区を中心にボランティア活動に従事している<sup>(8)</sup>。

神戸ユネスコ協会は、神戸市域の活動に限定せずに、海外での支援活動も積極的に展開している。

---

(4) また、多原（2011）は、同じく三重大学で、自らがブラジル人の小学生、中学生、高校生の学習教育を行う「ジョイア」という学習サークルに在籍して、ポルトガル語を用いてボランティア活動に従事したことを対象として分析している。

(5) 近年、日本企業のベトナムへの直接投資が増加し、ベトナムで日本語ブームが生じ、留学生が増加している（安井、2015）。

(6) 文部科学省（2008）は2008年7月29日に「留学生30万人計画」を発表して、2020年までに30万人受け入れを目標にしている。

(7) 神戸ユネスコ協会は、日本ユネスコ協会連盟に加盟する民間ユネスコ協会の一つである。2017年4月現在、全国約283のユネスコ協会が存在している（日本ユネスコ協会連盟、2017）。

(8) 例えば、2017年は、神戸国際交流フェア2017会場ボランティア（3月）、第47回みこうべ海上花火大会・清掃ボランティア（8月）、2017平和の鐘を鳴らそう運動・神戸湊川公園（8月）等のイベントに参加している。

2012年、同協会の加藤義雄会長を中心にカンボジアのコンポンチュナン州の貧困地域であるロミアス村に小学校（正式名ストイックアイトロミア小学校）を建設し、以降、会長、理事が毎年、1回から2回の1週間程の現地訪問を続け、「カンボジア国際ボランティア」を組織し、支援を継続している。日本経済大学ユネスコクラブの学生も2015年、2016年と神戸ユネスコ協会のカンボジア・プロジェクトにも加わり、2015年は留学生4名（中国国籍4名）、2016年は留学生6名（中国国籍4名、ベトナム国籍1名、モンゴル国籍1名）がカンボジアに赴いた（安井、2017a）。

この「カンボジア国際ボランティア」については、日本の大学に在籍する留学生が、日本の地域団体の一員として日本でも母国でもない第三国（カンボジア）においてボランティア活動に従事する点において、「留学生30万人」時代の一つの新たな挑戦であったと言える（安井、2017a：195）。

しかしながら、以下の課題も残された（同上）。

- (1) 教育プログラムへの反映が不十分
- (2) 短期間であり、現地において参加学生にとって持続可能な活動になっていない
- (3) 資金面で学生に負担が大きい

これらの問題点を踏まえて2017年は、神戸ユネスコ協会の理事2名、神戸ユネスコ協会青年部会員11名（日本経済大学ユネスコクラブ10名、神戸大学大学院生1名の留学生）が、「2017ネパール国際ボランティア」を企画し、ネパールの首都カトマンズ市及びバクタプール市での震災教育活動に従事した。

ネパールを選んだ理由は、2015年の大地震で大きな被害を受けたネパールに対し、同じ震災の歴史を持つ神戸に住む留学生たちが、神戸の防災知識の一部でも伝えられるのではないかと想定し、ネパール人学生が4名参加したことから、ネパールという「異国」でのボランティア活動において言葉の壁を無くすることができるのではないかという点であった。

更に上記の課題に答えるように目標を立てた。

- (1) ネパール人学生が参加することで、訪問期間が短期であっても、持続可能な支援の筋道を構築する
- (2) 教育プログラムとしては、出発の数カ月前から神戸市の避難訓練のパンフレットを例に、ネパール語の震災避難訓練マニュアルを作成する
- (3) ネパールでは実際に学校を訪れ（ユネスコスクールを訪問し）、子供たちと避難訓練を行う

#### 4. 「2017ネパール国際ボランティア」の詳細と分析

神戸ユネスコ協会青年部主催の「2017ネパール国際ボランティア」は、2017年9月1日に出発して9月8日に帰国する全8日間の日程であった【表1】。経由地でのトランジット泊、機内泊がそれぞれ1泊、含まれるため現地では、首都カトマンズのタメル地区にあるホテルに5泊となっている。

【表1】 神戸ユネスコ協会「2017ネパール国際ボランティア」旅程

月 日	内 容	宿 泊 地
9月1日(金)	関西国際空港発 (タイ航空を利用してバンコク経由でネパール・カトマンズへ；学生は、中国南方航空を利用し、雲南省昆明経由でカトマンズ入り)	バンコク泊
9月2日(土)	カトマンズ着	カトマンズ泊
9月3日(日)	午前：ラリットプル郡マハーラクシュミ市「シディプル寺子屋」【寺子屋支援】 午後：①日本ユネスコ協会連盟のネパールのパートナー National Resource Centre for Non-formal Education (NRC-NFE) 本部訪問 ②ラリットプル郡「クンベシュワール寺子屋」【寺子屋支援】	カトマンズ泊
9月4日(月)	午前：「チッタプル寺子屋」に隣接する Shree Deujagaun Elemnntary School 訪問 【避難訓練実施】 午後：バクタプル市 Shree Baradayani Lower Secondary School 訪問 【避難訓練実施】	カトマンズ泊
9月5日(火)	インドラ・ジャートラー祭【市内観光】	カトマンズ泊
9月6日(水)	カトマンズ市内のユネスコスクール訪問と【避難訓練実施】(4校) Nandi Secondary School；Mahendra Bhawan School；Galaxy Public School； Nandi Ratri secondary school；	カトマンズ泊
9月7日(木)	カトマンズ発	機内泊

【表2】 「2017ネパール国際ボランティア」費用(学生1人分、朝食以外の食事代は含まれない)

名 目	詳 細	価 格
飛行機代(往復)	関西国際空港～カトマンズ空港(往復)	中国南方航空利用(約4万円)
ホテル代5泊(カトマンズ)	1部屋2人利用	10,000円(1人分)
ネパール国内 バス代	ネパールにおける7日間の小型バス代	15,000円(1人分)
日本国内 空港バス代	神戸～関西国際空港(往復)	3,080円
保険代	旅行保険	2,500円
	合計	70,580円(学生)

費用は、2にの理事と1人の学生はタイ航空を利用してバンコク経由で、食事代を除いた総額が約11万円、学生たちは中国南方航空を利用して中国雲南省経由の昆明ルートを通り、食事代を除いた総額が約7万円となっている【表2】。ルートが異なるため、9月2日に、宿泊先のホテルで集合した。

参加者は合計13名であった。神戸ユネスコ協会の理事が2名、学生は11名(神戸大学と日本経済大学の留学生)によって構成されている(理事の1人は筆者である)。

留学生の内訳はネパール国籍4名(男性4名)、ベトナム国籍3名(男性2名、女性1名)、中国国籍3名(男性1名、女性2名)、モンゴル国籍1名(女性)であり、神戸ユネスコ協会の理事の2人(男性1名、女性1名)は日本国籍であった【表3】。

ボランティアの内容は大きく二つあり、一つは日本ユネスコ協会連盟が現地のNGOパートナーである National Resource Centre for Non-formal Education と共に運営する「寺子屋」(途上国における識

【表3】 2017年神戸ユネスコ協会「2017ネパール国際ボランティア」参加者

	出身	学年	性別	国際ボランティア参加回数
A君	ネパール	学部3年	男性	1回目
B君	ネパール	学部2年	男性	1回目
C君	ネパール	学部1年	男性	1回目
D君	ネパール	学部1年	男性	1回目
Eさん	中国	学部4年	女性	2回目
F君	中国	学部4年	男性	1回目
Gさん	中国	大学院生	女性	1回目
Hさん	モンゴル共和国	学部3年	女性	2回目
I君	ベトナム共和国	学部3年	男性	1回目
J君	ベトナム共和国	学部2年	男性	1回目
Kさん	ベトナム共和国	学部1年	女性	1回目

字率向上のための社会人向け Community Learning Centers)<sup>9)</sup>の視察と支援である。

もう一つは、ユネスコスクールを中心とする現地の小学校、中学校、高校での避難訓練であった。ボランティアとして避難訓練を実施することは、ネパールの学校では避難訓練が行われておらず、2015年4月25日のネパール地震の際、学校で大きな被害が出たと聞き、日本型の避難訓練を伝えることができればと考えたことがある。その事前準備として、ネパール語の避難訓練マニュアル（英題 DISASTER PREVENTION ACTIVITIES MANUAL、原題 प्राकृतिक प्रकोप र रोकथाम）を、ユネスコクラブの学生と顧問が作成し、現地に約50部を持参した。

ここでは、学生たちがより長期間準備した避難訓練ボランティアを中心に言及したい。

ネパールにおける避難訓練は、チッタプール寺子屋に隣接する Shree Deujagaun Elemnentary School（小学校）、バクタプール市 Shree Baradayani Lower Secondary School（小学校）、カトマンズ市の4つのユネスコスクール Nandi Secondary School、Mahendra Bhawan School、Galaxy Public School、Nandi Ratri secondary school（いずれも中高一貫校）で実施した。

後述するように、基本的にネパール出身の留学生が、ネパール語で避難訓練の手順を説明し、子供たちスムーズに情報が伝わり、言葉の壁を越えて避難訓練を実施することができた。日本において外国人がボランティアを行う場合、ボランティアをする外国人そのものに対する親近感が第一に必要であると認識されているが（熊・佐々木、2002：84）、ネパール人の学生たちが私たちが訪れた学校において、ネパール語で話したことは、現地の子供たちに「親近感」を抱かせる効果となったであろう。

(9)「寺子屋運動」は、1990年から始まった日本ユネスコ協会連盟の途上国支援のプロジェクトであるが（国際識字年記念“世界寺子屋運動”NGOフォーラム名古屋・1990実行委員会、1991：139-158）、その名の通り、日本の江戸時代における庶民の教育機関である「寺子屋」から名付けられたものである（National Federation of UNESCO Associations in Japan, 2005：20；日本ユネスコ協会連盟、2004：13；2005：21；2006：3-5；富岡、2013：67）。

## 5. 「2017ネパール国際ボランティア」のアンケートの結果と考察

ネパールから帰国後、ボランティアに参加した4人のネパール人学生に以下の質問をインタビュー形式で行った。ネパール人に限定した理由は、ネパール人留学生が母国で、他国出身の友人たちとボランティアに従事することが異例であり、どのようにボランティア活動を認識するかに注目したことがある。

仮説としては、かつて、日本経済大学の中国人学生が母国の上海外国語大学において、法政大学の日本人学生と上海外国語大学の中国人学生と共に研究発表をした時の経験から、今回の「2017ネパール国際ボランティア」においても他の留学生と現地の人々の間に入りアイデンティティが「マージナリ化」するのではないかというものであった<sup>(10)</sup>。

質問①：今回ボランティアに参加してどう思ったか。

質問②：避難訓練は有効だったか。

質問③：もう一回やってみたいか（ネパールで、ネパール以外でも）。

質問④：多国籍での国際ボランティアについてどう思ったか。

【表4】 ネパール人学生へのインタビュー結果

	質問①	質問②	質問③	質問④
A 君	ボランティアとして友人たちと母国に帰って、いつもと違う感じがした。自分が知らない学校をいくつも訪問し、発見が多かった。	有効だったと考える。パンフレットを作ったことは子供たちにも簡単に伝えられて良かった。	是非、続けてみたい。避難訓練だけでなく、人工呼吸や心臓マッサージの方法なども伝えていければいいと思う。	ベトナム人、中国人、モンゴル人の友人たちと行けて良かった。皆、経済的に大変なのにネパールに来てくれた。感謝している。
B 君	自分の国に大学の仲間と行き、ボランティアができて良かった。ネパールでは日本と比較すると貧しい学生が多く、残念に思ったが、現状を直視できたことは自分自身に勉強になった。	とても有効だった。私たちが訪れた Nandi Ratri secondary school では、毎月、避難訓練を行っているという。素晴らしい訪問になった。	是非、継続したい。ネパールでは、この夏に昨年皆と訪れた Nandi Ratri secondary school 校を再訪する計画を立てている。	ベトナム人やモンゴル人、中国人の友人たちがネパールを訪れてくれて良かった。ネパールの子供たちもいろいろな国の人に会えて勉強になったと思う。
C 君	2015年の地震で大きな被害が出ている。そんな（自分の母国の）ネパールでボランティアができてよかった。	大地震では多くの子供が犠牲になった。今回、子供たちに避難訓練ができて嬉しかった。	次に帰国する際、またユネスコスクールを訪問したい。特に Nandi Ratri secondary school 校。	皆、お金がないのに、バイトして旅費を貯めてネパールに来てくれた。有難いと思った。
D 君	日本に比較して貧しいが、ネパール人も勉強を頑張っている。仕事のためにネパール人も頑張っている。役立ちたいと思った。	有効だった。肉親を亡くした学生も沢山いるので、次の地震の際、このような犠牲を出さないためにも必要だと思う。	ぜひやってみたい。ネパールでも、ネパール以外でも首都ではなく、田舎でボランティア活動をすべきだ。	色々な国籍の友人とネパールでボランティアをして、考え方が違って面白かった。これからも、活動を続けたい。

(10) 2015年9月16日、中国・上海の上海外国語大学松江キャンパス第8教学棟にて、法政大学社会学部の学部学生10名、上海外国語大学日本文化経済学院の学生5名、日本経済大学神戸三宮キャンパスの学部学生3名（聴講参加を加えると計6名）が「グローバル化と東アジア」をテーマに日頃の研究成果を日本語で発表した（安井、2016）。日本経済大学の3名は日本に学ぶ中国人留学生であり、母国の上海外国語大学で発表することになったが、日本人留学生と中国人留学生の間に入り、マージナリ化する状況が生じた（安井、2016：305）。

前頁の通り、母国でのボランティア活動に参加したネパール人学生は、概して好意的に経験を認識している。特に避難訓練に関しては、前もってネパール語の震災対策のパンフレットを作っていたことを彼らは評価している。そして、多国籍の友人たちが経済的に苦しい中、ネパールに来てくれたことを感謝している。このようにアイデンティティとしては、マージナル化が見て取れた。同時に、自分たちは母国を日本と比較して見つめ直す機会に恵まれたことを喜んでいる。ボランティアに関しては、日本帰国後も、ネパールの関係者と連絡を取っており、持続可能な方向に進んでいるといえる。何もよりも、ネパールでのボランティア活動、及び他国での国際ボランティアへの参加に全員が強い意思を抱いていたことは特筆すべきであろう。

## 6. 結 論

神戸ユネスコ協会の「2017ネパール国際ボランティア」は、ネパール人留学生が主体となっており、カンボジア人が皆無であった前年の同協会主催の「カンボジア国際ボランティア」とは異なる。

学生自身が通訳できるため、より積極的に直接的にボランティア被対象者との情報のやり取りが可能であった。また、通訳代も必要とせず、土地勘もあり、移動のための車も比較的安価に手配ができるため、非常に経済的であった。また、ネパール人の学生たちは、ボランティア終了後も現地の学校関係者と連絡を取っており、課題であったボランティアの持続が可能となったともいえる。

検討課題としてはコストの問題がある。食費を入れると1人10万円近くかかっており、コストの問題が解決したとは言えない。また、持続可能性に関しても、個人ベースの試みに限定されており、不確実性があることは否定できない。それに加え、ボランティアに参加したネパール人以外の留学生（ベトナム人、中国人、モンゴル人）がどうしてもサブ的な位置付けに甘じてしまい、積極性に欠けてしまう傾向があった。

しかしながら、それでも、日本の増加する留学生が、母国で日本の地域ボランティア組織（神戸ユネスコ協会）の一員としてボランティア活動に従事することは今までになかった展開であり、十分に着目に値すると考える。

## 文献一覧

- 麻生迪子・松永典子（2014）。「日本人大学生の社会参加への意識：キャンパス周辺に居住する「生活者」としての外国人との比較から」, 地球社会統合科学, 21(1・2), 59-71 頁.
- 工藤英明・佐藤則好・松浦倫・里中玉佳・小串ナナ子・寺本真悠子・神野未翔子・上野千種（2013）。「留学生の絵本読み聞かせボランティア活動の報告」, 別府溝部学園短期大学紀要, 33, 121-129 頁.
- 熊安娜・佐々木真理（2002）。「中国語と日本語を用いた情報用語の学習による児童の国際理解意識の形成」, 日本教育情報学会, 18, 81-84 頁.
- 神戸ユネスコ協会（2018）。「神戸ユネスコ協会について」, HP [www.unesco.or.jp/kobe/about.html](http://www.unesco.or.jp/kobe/about.html), 2018 年 12 月 31 日.
- 国際識字年記念“世界寺子屋運動”NGO フォーラム名古屋・1990 実行委員会（1991）.『すべての人に教育を：国際識字年記念“世界寺子屋運動”NGO フォーラム名古屋・1990 報告書』, 中央出版株式会社.
- 里中玉佳・瀧上裕賢（2014）。「留学生の絵本読み聞かせボランティア活動の報告」, 別府溝部学園短期大学紀要, 34, 53-57 頁.

- 多原明美 (2011). 「留学生体験やボランティア活動を通して見た外国人生活者のニーズ」, 都市住宅学, 74, 36-41 頁.
- 駐日ネパール大使館 (Embassy of Nepal Japan) (2016). 「在日ネパール人による感謝と追悼セレモニー～新宿、名古屋、難波、博多など全国 26 カ所で開催～」, 2016 年 5 月 25 日, [http://snowdolphins.sakura.ne.jp/sblo\\_files/snowdolphins/image/thankyoujapan.pdf](http://snowdolphins.sakura.ne.jp/sblo_files/snowdolphins/image/thankyoujapan.pdf), 2019 年 1 月 31 日.
- 富岡守 (2013). 「寺子屋師匠はボランティア」, 新島学園短期大学紀要, 33, 67-95 頁.
- 日本学生支援機構 (2018). 「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 [https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/index.html](https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html), 2018 年 12 月 31 日.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2004). 「寺子屋レポート 2004」 社団法人日本ユネスコ協会連盟.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2005). 「寺子屋レポート 2005」 社団法人日本ユネスコ協会連盟.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2006). 「寺子屋レポート 2006」 社団法人日本ユネスコ協会連盟.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2017). 「日本ユネスコ協会連盟について」, <http://unesco.or.jp/unesco/nfuaj/>, 2018 年 12 月 31 日.
- 福岡昌子 (2009). 「『実践：日本語教育 1&22007』 企画実施報告(2) 2. 『夏休みの宿題の助っ人 — 留学生の母語による学習支援』」, 三重大学国際交流センター紀要, 4, 49-65 頁.
- 許真 (2011). 「ボランティア 今できること」, アジアの友, 2011 年 4-5 月号, 第 490 号, 13-15 頁.
- 松永典子 (2016). 「留学生はボランティア活動をどう意味づけているのか：地域社会参加, キャリア形成との関連から」, 地球社会統合科学, 23(2), 1-11 頁.
- 松本久美子 (2001). 「ボランティア活動を通しての主体的な地域社会参加の試み：留学生による病院でのボランティア活動を事例として」, 広島大学留学生教育, 2001 (5), 31-40 頁.
- 文部科学省 (2008). 「『留学生 30 万人計画』 骨子」 2008 年 7 月 29 日 [www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29\\_kossi.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29_kossi.pdf), 2018 年 12 月 31 日.
- 安井裕司 (2015). 「日本への留学生トレンドの変動：日越経済関係の変化とベトナム人留学生の増加」, 日本経大論集, 44(2), 89-99 頁.
- 安井裕司 (2016). 「『国際合同ゼミ合宿・国際研究発表会』の考察 — 多国籍に跨る学部学生による国際交流 —」, 日本経大論集, 45(2), 295-307 頁.
- 安井裕司 (2017a). 「留学生による国際ボランティア活動・スタディツアーの考察 — 日本経済大学ユネスコクラブの留学生による『カンボジア国際ボランティア』 —」, 日本経大論集, 46(2), 184-197 頁.
- 安井裕司 (2017b). 「大学のグローバル化と日本の留学生政策」, 実践経営学研究, 2017, No.9, 303-312 頁.
- 渡部留美 (2016). 「留学生支援における大学と地域ボランティアの連携に関する一考察」, 留学生教育, 21, 1-7 頁.
- National Federation of UNESCO Associations in Japan (2005). *Terakoya Report 2005*, Tokyo: National Federation of UNESCO Associations in Japan.
- OECD (2015). *Education at a Glance 2015: OECD Indicators*, OECD Publishing, 2015